

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Forty-one years at Gaidai

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 四郎, Wada, Shiro メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/579 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



外大での41年間

和田 四郎

これが老化というものかもしれない。外大を去って僅か半年しか過ぎ去っていないにも関わらず、ここ数年の間に起こったすべてのことが霧の中へ消えかかろうとしているが、私が神戸外大の助手として採用された1970年のことは鮮明な（しかし苦い）記憶として残る。日本中で吹き荒れた大学紛争の嵐が静まり始め、月の石の万国博覧会、天六のガス爆発事故、よど号ハイジャック事件、三島由紀夫の自決等大きな事件や出来事が多い年であった。

採用されたとはいえ、募集要項を取り寄せて応募したわけではない。すべては井の中の蛙の勘違いが原因で始まった。修士2年（1969年）の時、指導教授安井稔先生は突然私に「神戸外大の助手に推薦したいのだが」と言われた。当時の私は、大学（文学部）の助手といえば、学生と教授との間の橋渡しをする以外は、講座研究室の机で本を読み、読書会の計画や研究室旅行（研究発表会）の世話をする、少なくとも授業は持たないものと考えていた。従って、「神戸」の「外国語大学」で「助手」としてまだ勉強ができると思った私に断る理由などは何もなく、「よろしくお願いします」と即答した。

ところが、しばらくしてから助手は助手でも英文法と英作文の授業を週に学部2コマと2部4コマの合計6コマも担当しなければならない「助手」であることが判明。暢気に構えていた私は数ヶ月後に国際都市の外大生に英語を教えることなどできるだろうかと不安に襲われた。しかし後の祭。覚悟を決めるしかなかった。

何しろ貧乏学生で、神戸までの旅費とスーツは兄に何とか工面してもらい、机も下宿で代々使われていた古いものを譲り受け、本、タイプライター、

柳行李，布団袋，こたつなど必要最小限の荷物を，別の兄の知人が探してくれた西灘駅前の4畳半のアパートに運び込んだ（このアパートも震災で取り壊されている）。通路を挟んで両側に部屋があり，暑い夏に入り口を開けたままで寝ると向かいの若い一家の足が見えるようなところであった。

旧キャンパスは六甲山を背にした小高い丘にあり，そこからの眺望は眩しく，広く，東西に連なる二つの山脈に挟まれて育った私にはまるで別世界であった。しかし，初めての授業の日の「地獄坂」はその名のように奈落の世界へ続く果てしのない坂道で，絶景に見とれている余裕などはない。恐る恐る2部の教室に入ると，すでに学生達は今とは逆に最前列から着席し，空席は最後列に残るだけであった。しかも，そのほとんどが私よりも年上の社会人である。スーツにネクタイを締め，背筋をピンと伸ばして顔を上げ，刺すような目を新米教師に向けていた。表面では平静を装ってはいたが，両膝が震えていたのは坂道のせいではなかった。

助手の仕事が大学によって異なることも知らなかったほどであるから，指導教授がつけられていることも知らなかった。しかも，その指導教授からは「Chomskyのどこがおもしろいのかね」と呟かれた。当時は何しろ最先端の言語理論を研究している（それには違いないのだが）と思い込んでいただけの青二才にとってはあまりにもまとも且つ思いもよらない問いかけであり，曖昧な言葉ですぐごと部屋を去るしかなかった。

その上，安井先生に推薦を依頼した先生が突然私と入れ替わるように外大を転出され，学内に相談すべき人は誰もいなくなった。親方のいない丁稚に等しいことを知った私は，意を決して小西友七先生の研究室を訪ね，英語学特殊講義へ出席する許可をいただいた（これも指導教授の先生には礼を失した行動であった）。そして六甲英語学研究会に出席するようになった。

すべてのことが新しい経験ばかりで，刺激的であったが，当然当惑することも多かった。例えば，そこへ行けばいろいろな情報交換ができる英語学研究室はおろか英米学科研究室がなく，教員はそれぞれの研究個室に閉じこ

もっていたのである。しかし、廊下を歩くと中から話し声や時には「パチン、パチン」とか「コツン、コツン」といった音が聞こえる部屋もあり、情報の交換は個室の中で色々なやり方で行なわれていることを知った。

しかし、もっと深刻な問題は、六甲英語学研究会での英語学が私の知っている英語学ではなかったことである。私も専攻は英語学であり、英語学研究室に出入りし、直接の研究対象は英語であるということは意識していた。しかし、今振り返ると、その英語は言語理論のための資料の一つにすぎず、英語そのものの研究をしていたとはいえなかったのである。このことは当時研究会の仲間からもまた同僚の先生からも機会あるごとに指摘されていたのであるが、それが的を射ているものであるだけになおさら頑にフォーマルな公式化に腐心する私であった。

それに対して、小西先生と六甲の研究会の英語学は英語そのものの研究であった。英語の一つ一つの語（句）の用法を各種の辞書の記述、類似の表現や自分で収集した生の用例とともに丹念に比較しながら緻密に吟味するものであった。用例といえば文献に登場する人工的それ故無機質な単文であり、生きた用例をあまり収集していなかった私は、研究会で次から次へと登場する生の用例にこれまで感じたことのなかった温もりを感じ、その一つ一つの記述も興味深いものであった。当初はあまりにも細かすぎる分析に戸惑いを感じていたが、そのうちに、当時の私が、安井先生からこれにだけはならないようにといわれた「Chomsky 読みの英語知らず」であることにやっと気がついたのである。

しかし、数々の用例もさることながら、それ以上に私が共感したのは、何故そこでそのような語句が用いられるのかということに対する日常的なことばによる分かりやすい説明であった。これまで理論の枠組みの中で専門用語を駆使した説明に慣れていた私は、難解な用語を用いなくても言語の研究ができるということに一種の安堵感を覚え、理論から脱することの自由と面白さを、そして理論がなくても論理的な説明は可能であることを感じた。大き

なことを言えば、語法研究的な事実の吟味とその積み重ね、そして「何故」を突き詰めて行くことによって望ましい理論について考えるヒントも見えて来るのではないかとも思うようになった。

もっとも、このようなことに気がついたというか、このような心境になったのが停年退職が見え始めた頃というのも情けない。しかも安井先生と小西先生という二人の偉大な英語学研究者を恩師と呼べる人間にしてはなおさらふがいないさも感じ、悔いも残る。しかし、研究面でも何かを成し遂げることもなく、ただ馬齢を重ねただけの私がやっと語法研究の可能性と自分なりの方向性を感じながら停年を迎えるとは予想もしなかったことであり、第二の人生のために外大がくれた大きなプレゼントであると密かに思っている。これも元はと言えば、まだまだ学問的にも精神的にも未熟な時代にあのような語法研究とその仲間達という幸運に恵まれたからに他ならない。

顧みればこれまでの私は運のみで生きてきたようだ。大連から新京に引っ越したばかりの家族がソ連兵に追われて脱出した時、私はまだ母親の胎内にあり、生まれたのは北朝鮮の収容所（刑務所とも聞いたことがある）である。それから生まれたばかりの私を抱えて38度線を徒歩で越え、奇跡的に家族6人全員が博多に辿り着いた。途中子供を亡くした家族もいれば、過酷な道中を案じ現地人に子供を託した親達もいた。母も幾度か「その子は置いて行きなさい」と言われたと語っていた。栄養失調で青黒くなっていた私は、異国の土になるか、さもなければ残留孤児になっていてもおかしくはなかった。

生かされた私はその後の時代にも恵まれた。終戦直後のどん底生活もそれと知らずに育ち、近年の就職難も不景気も厳しい競争社会も経験せずに停年を迎えた。

阪神淡路大震災の震源が目の前であったにもかかわらず被害ほとんどなく、枕元の本棚だけは本もその棚の上に置いてあったコンクリートのブロックも落下しなかった。

世間知らずの丁稚が開いた小さな店にも通ってくれる個性豊かな学生たちがいた。彼らの研究を指導することは私自身の研究の一部にもなったばかりではなく、社会的にも貴重な経験をさせてもらった。

そして何よりも、41年もの長い間頼りない私を見守り育ててくれた外大のすべての教員と職員の皆さんにはお礼すべき言葉もない。特にいくつかの重要な公務に際しては優柔不断な私を温かく支えてくれた。

これらの人々に出会わなかったならば今の私はなかった。人にも時代にも恵まれた41年間であった。今は感謝の念しか残っていない。